

松濤 明著 『風雪のビバーク』

“1月5日 フーセツ

SNOWHOLE ヲ出タトタン全身バリバリニコオル、手モアイゼンバンド
モ凍ッテアイゼン ツケラレズ、ステップカットデヤリマデ ユカン
トセシモ (有) 千丈側ニスリップ、上リナホスカナキ

タメ共ニ千丈ヘ下ル、カラミデモラッセルムネマデ、15時SHヲホル

1月6日 フーセツ

全身凍ッテカナシ ナニトカ湯俣迄ト思ウモ有元ヲ捨テルニシノビズ、
死ヲ決ス アカアサン アナタノヤサシサニ タダカンシャ、
一アシ先ニオトウサンノ所ヘ行キマス。何ノコーヨモ出来ズ死ヌ罪ヲ
オユルシ下サイ、井上サンナドニイロイロ相談シテ

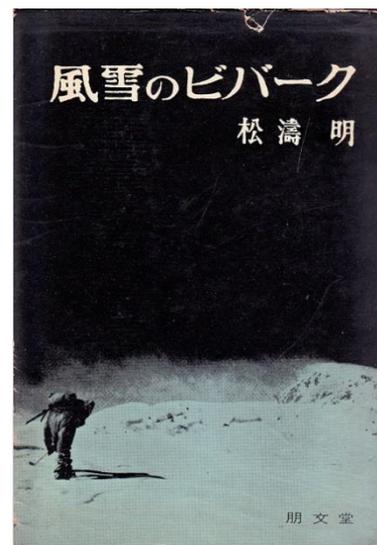
井上サン イロイロアリガトウゴザイマシタ カゾクノコトマタオ
ネガヒ 手ノユビト一ショウデ思フコト千分ノイチモカケズ

モーシワケナシ、ハハ、オトートヲタノミマス

有元ト死ヲ決シタノガ 六時 今 十四時 仲々死ネナイ、漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンプルへ、
有元HERZ ソロソロクルシ、ヒグレット共ニ凡テオワラン

ユタカ、ヤスシ タカヲヨ スマヌ、ユルセ、ツヨクコーヨウタノム

サイゴマデ タタカウモイノチ 友ノ辺ニ スツルモイノチ 共ニユク (松ナミ)・・・”



昭和24年1月、厳冬期の槍ヶ岳北鎌尾根に向かった2人パーティーが消息を絶つという遭難事故が発生した。このパーティーの一人が書き遺した手記が後日捜索隊により発見されたが、それによれば、彼等2人は大風雪に阻まれて北鎌独標から退却の途中、千丈沢の雪洞でビバーク中に最悪の事態に陥った。暴風雪の中、ここまでの8日間にも及ぶツェルトや雪洞での苦闘の末、やっと千丈沢まで下って雪洞を掘ったが、風雪なお止まず、到底湯俣まで辿り着いて生還できる望みがないことを悟り、この雪洞で死を決して従容として死に就いたのであった。

冒頭の文章は、この最期の時に凍傷による不自由な手で綴られた手記(遺書)の一部である。力果て、凍傷で鉛筆も握れなくなった指で書かれたのであろう、手記が書かれていた手帳のページも飛び飛びになって、字も乱れた文字で綴られていたという。

生還できる見込みがない最期の壮絶な土壇場の中で、冷静に整然と辞世の手記を綴って逝った若き岳人の心情はいかばかりであったであろうか。行年28歳。

この遭難事故は既に70年前のことであり、また夭折したために山の本なども著していないので、松濤 明という岳人の名前を知っておられる年代の方々是最早少ないと思われるが、彼は中学校の頃から山に親しみ、登歩渓流会に入ってから谷川岳や八ヶ岳の開拓に熱意を燃やした先鋭的なアルピニストであった。当時の日本の山岳界は、日本山岳会や著名大学山岳部に代表されるような経済的に恵まれた人びとが先達や人夫を雇って行う“上流階級の遊び”が主流であったが、彼はそのような大名旅行登山を批判し、自分たちの足と手だけで登る登山を実践したので、岳界からは敬遠された孤高の存在であったらしい。この遭難事故も、たった二人で厳冬期の北鎌尾根から槍・穂・焼岳まで縦走するという当時としては考えられないような山行で起こった遭難であった。

本書は、彼が書き残していた山行記や山への断章と、最後となった北鎌尾根の記録メモ、またその捜索の様態などが彼が所属していた登歩渓流会によって編集・出版されたものである。

朋文堂 1961 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)